

もっと知りたい

武者小路実篤

さね あつ 実篤作品を読んでみよう!

いっ きゅう
一 休

一休さんは こんな人

今から600年以上前の14・5世紀に活躍した、有名な禅僧です。幼い頃からかしく、「とんち小僧の一休さん」としても知られています。



時は戦乱の世、「下剋上」と言って、下の者が上の者の権力を奪うことが横行しました。天災も続き、世の中がとても不安定でした。

まわりの僧侶たちを見まわしても、本当にさどつている人はなかなかいません。自分も同じではないか？ 真っ正直なところのある一休さんは、自ら望んでひたすら厳しい修行にあけくわしました。

一方で、うそが大きらいな一休さんは、時にふうがわりな行動をして、世の人々をいましめたくもなるのでした。

実篤、一休を語る…

一休さんには、二つのがつた性質がありました。いっぽうは、すこしらんほうで、火のような性質。いっぽうは、ぞんがい*1まじめで、つつしむことを知っている、ふかいふち*2の水のような性質です。

*1ぞんがい：意外と
*2ふち：川の深み

一休さんののぞむのは、ありのままの生活、それで心があちつき、うれしくなる生活でした。一休さんは、人々にむずかしいことはのぞみませんでした。人間が本心のとおり、すなおに生きられることをのぞみました。

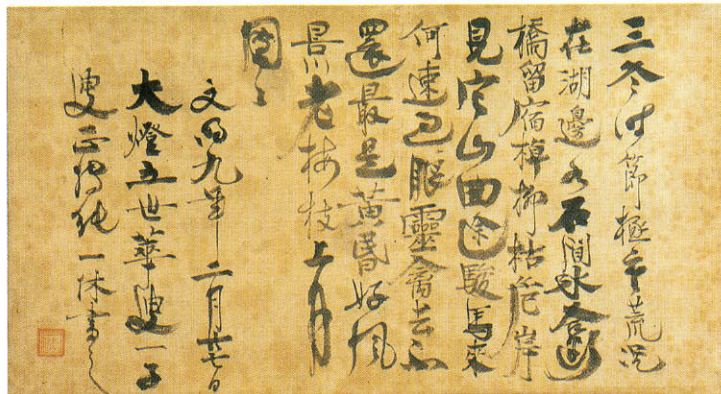


昭和56(1981)年11月、講談社火の鳥伝記文庫

こんな作品

一 休

昭和8(1933)年に書かれた「一休和尚」が、昭和12(1937)年6月「一休・曾呂利・良寛」としてまとめられ、それをもとに昭和49(1974)年6月、子ども向けに書き直した『一休さん』が出版され、さらにその後、火の鳥伝記文庫にも収められた(いずれも講談社)。



一休さんが書いたと伝わる書「三冬時節」

好きな偉人^{いじん}を聞かれると実篤は、よく一休さんの名前をあげています。

このワークシートで紹介した伝記『一休』のほかにも、「一休と地獄^{じごく}大夫^{たゆう}」「或る日の一休^あ」「一休の独白^{どくはく}」など、一休さんが登場する作品を書いています。

実篤は本物・贗物^{にせもの}にかかわらず、精神的なエネルギーを得られると感じた書画を身近に置いて、鑑賞^{かんしょう}するのを日々の楽しみとしていました。この書も、実篤愛蔵品^{あいぞうしん}の一つです。



考えてみよう!

★上の「三冬時節」、何と書いてあるか読めなくても、昔から「文字は人となりをあらわす」と言います。文字から感じられる、一休さん^{ひとがら}の人柄^{そうざう}を想像してみましよう。

.....
.....
.....

★実篤は、一休さんのどんなところに魅^とかれていたのでしょうか？
かしこかったから？ ふうがわりだったから？ うそがきらいだったから？
作品を読んで、考えてみよう！

.....
.....
.....